

新設◎教育課程2

大学院医歯学総合研究科 臨床腫瘍学分野

がん診療のプロフェッショナルを育成

臨床腫瘍学分野
三宅 智教授

2012年5月に新設された臨床腫瘍学分野は、がんを包括的に診断するプロフェッショナルの育成を目的としている。2007年に施行された、がん対策基本法を受けて、文部科学省の「がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン（通称がんプロ）」が始まった。2012年度の第2期がんプロにおいて東京医科歯科大学が採択されたことをきっかけに、臨床腫瘍学分野が設置された。

まずは、大学院教育を中心にスタートするが、2013年度後期からは、腫瘍ブロックの中に緩和ケアと精神腫瘍学の講義を設ける。卒前・卒後の教育を通じて、がん診療への興味を喚起し、高い専門性を持った人材育成を行う計画だ。

また、基礎と臨床を橋渡しするがん研究、緩和ケアや化学療法を中心とした臨床分野でも、当分野が中心的役割を果たす。2012年7月には、臨床を担う新たな診療部門として、従来のがん治療センターと外来化学療法・注射センターを統合した「腫瘍センター」が医学部附属病院に設置された。

腫瘍センターは、がん登録、化学療法、緩和ケア、がん診療連携、がん相談支援の5つの部門から成り、がん治療に関わる各診療科の連携を支援する。患者さんに対しても、医師、看護師、ソーシャルワーカー、薬剤師といった専従スタッフによるチーム体制で化学療法や緩和ケアを行い、がん治療に

関するサポート機能を充実させる。

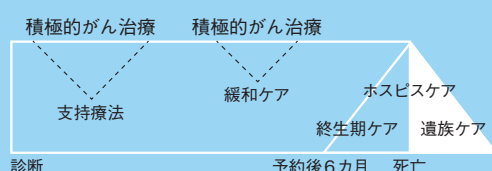
臨床腫瘍学分野の責任者、および腫瘍センター長には、化学療法や緩和ケアを専門とする三宅智教授が就任した。

「臨床腫瘍学分野では、がんプロによる人材育成の推進という目的に加え、がん診療連携拠点病院を目指した体制づくりというミッションが課せられています。そのため、レジメ審査委員会やワーキンググループ、カンサーボードを定期的に開催するなど、腫瘍センターが窓口となって各診療科の横のつながりを強化します。緩和ケアや化学療法についても、腫瘍センターが中心的役割を果たすことになります」

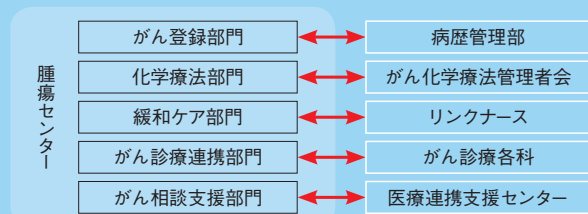
がん対策推進基本計画では、がん診断時からの緩和ケアの提供が必要だとされている。そこで、院内緩和ケアチームや臨床各科と共同して、効率的な緩和ケアの提供体制整備についての研究を始めた。このほか、食道がん診療体系やがん患者支援プログラム、肺がんの新規抗がん剤におけるバイオマーカーなど、様々な研究も展開する。

「この分野だけで、教育、研究、臨床が成り立つわけではありません。様々な診療科や医療スタッフ、時には他校や外部の病院との協力が不可欠です。腫瘍センターを中心につながりを深めながら、優れた専門医を育てていきたいと考えています」（三宅教授）

■ 包括的がん医療のモデル



■ 腫瘍センター



■ がん診療における位置づけ

